

第20回 アジア競技大会選手村 後利用基本構想

令和2(2020)年3月

愛知県・名古屋市



GO ACTIVE

GO ASIA

GO GREEN

GO FUN

GO FUTURE



愛知県知事
大村 秀章



2026年に愛知県・名古屋市で開催される第20回アジア競技大会は、45の国と地域から、約15,000人の選手団が参加するオリンピックに次ぐ規模の大会です。

大会のメイン選手村は、移転する名古屋競馬場の跡地を利用します。選手村では先端技術も活用しながら、安全で快適に滞在できる環境を整えるとともに、文化プログラムなどを通じて選手同士や県民との交流を図っていきます。さらに、こうしたアジア競技大会での取組がもたらす効果を大会のレガシー（遺産）として大会後の跡地利用にも浸透させ、地域のまちづくりにつなげることが重要です。

このようなことを踏まえ、名古屋市と共同で「第20回アジア競技大会選手村後利用基本構想」を策定いたしました。

本構想では、持続可能な開発目標（SDGs）を念頭におき、開発コンセプトを「安心と交流を生み出す次世代拠点」と設定しました。

そして、このコンセプトから導き出した「スポーツにより健康に暮らし、元気になるまち」をはじめ5つの夢を実現するまちづくりを進めていくこととしています。今後とも、大会が成功となるよう着実に選手村整備を進めるとともに、大会後はこの地区の魅力を高める新たな拠点となるよう取り組んでまいります。

最後になりますが、本構想の策定にあたり、貴重な御意見を賜りました「アジア競技大会選手村後利用基本構想有識者懇談会」の委員を始め、御協力をいただきました関係の皆様に対し、厚く御礼申し上げます。

名古屋市長
河村 たかし



「第20回アジア競技大会」のメイン選手村を整備する予定の名古屋競馬場の周辺は、干拓と運河により発展した地域であり、木材集積地からベニヤ板製造、航空機産業等へ発展し、日本を代表する国際貿易港である名古屋港を擁する、工業が盛んなエリアに位置しています。

また、開発予定地は、最寄り駅から名古屋駅まで13分の好立地であり、2027年にはリニア中央新幹線の開業（品川—名古屋間）を控えるほか、付近には日本最大級の延べ床面積を誇る名古屋港水族館があり、金城ふ頭では国際展示場の再整備が始まるなど、更なる発展が期待されます。

このような背景を踏まえ、貴重な大規模公有地の開発であることから、民間企業が活躍できる環境を整えるために、行政としてしっかりと役割を果たしてまいります。そして、子どもから高齢者まで幅広い世代が元気に暮らせ、災害に強く、若者が集い、にぎわいやイノベーションが創出される新たな拠点となるよう、官民が連携して進めていきたいと考えています。

この「第20回アジア競技大会選手村後利用基本構想」をもとに、この地域が「新しいライフスタイルがはじまるスマートビレッジ」として魅力的なまちとなり、ナゴヤの顔の一つとなるよう、全力で取り組んでまいります。

地域をはじめ関係の皆様には、本構想の策定にあたりご協力をいただき、心から感謝します。

今後もお力添えをいただきますようお願いいたします。

目次

1. 後利用基本構想とは	1
1-1 基本構想策定の趣旨	1
1-2 基本構想の位置づけ	1
1-3 持続可能な開発目標（SDGs）との関係	2
2. 現状と課題の整理	3
2-1 計画予定地の概要	3
2-2 計画予定地を中心としたまちづくりに向けた現状と課題	6
2-3 後利用事業の前提条件	7
2-4 現状と課題及び前提条件から求められるまちの方向性	7
3. 開発コンセプト	8
4. 土地利用の考え方	9
4-1 導入機能	10
4-2 施設の配置イメージ	12
4-3 街のイメージ	13
5. 事業化に向けて	17
5-1 官民連携による開発の推進	17
5-2 選手村整備事業との連携	19
5-3 計画予定地を核としたまちづくりとの連携	20
5-4 まち全体での取組	21
5-5 開発スケジュール	24
参考1 第20回アジア競技大会について	25
参考2 計画予定地を中心としたまちづくりに向けた現状と課題	26
参考3 関連する計画	33
参考4 用語解説	38
参考5 策定の経緯	40

1

基本構想策定の趣旨

令和4（2022）年に弥富市に移転予定の名古屋競馬場（名古屋市港区泰明町1-1）の敷地を、令和8（2026）年に開催する第20回アジア競技大会のメイン選手村として利用することが予定されています。

メイン選手村の検討に際しては、大会時の選手村を計画するだけでなく、大会後もレガシー（遺産）として有効活用されるよう、大会を契機としたまちづくりも合わせて進めることが重要です。さらに、名古屋競馬場の敷地は、約20haという大規模な公有地であることから、行政がしっかりと役割を果たしながら、民間活力の導入を図り、新たな地域の拠点として都市機能を誘導し、適切な土地利用転換を進めていく必要があります。また、名古屋競馬場の移転、選手村の整備・運営、大会後のまちづくりという各段階を踏まえ長期的な視点に立ち事業を進めていく必要があります。

このような背景を踏まえ、アジア競技大会開催後の令和12（2030）年頃を見据え、将来のまちづくりの方向性を示すために、愛知県及び名古屋市が本構想を策定するものです。

※選手村の計画・整備は、大会の準備・運営の実施主体である、一般財団法人愛知・名古屋アジア競技大会組織委員会（以下「組織委員会」という。）が実施

2

基本構想の位置づけ

本構想は、第20回アジア競技大会の開催を念頭におき、愛知県の「あいちビジョン2020」（次期あいちビジョンを検討中）及び「アジア競技大会を活用した地域活性化ビジョン」、名古屋市の「名古屋市総合計画2023」及び「2026アジア競技大会NAGOYAビジョン」と整合するとともに、その他の個別計画との連携を図った内容とします。

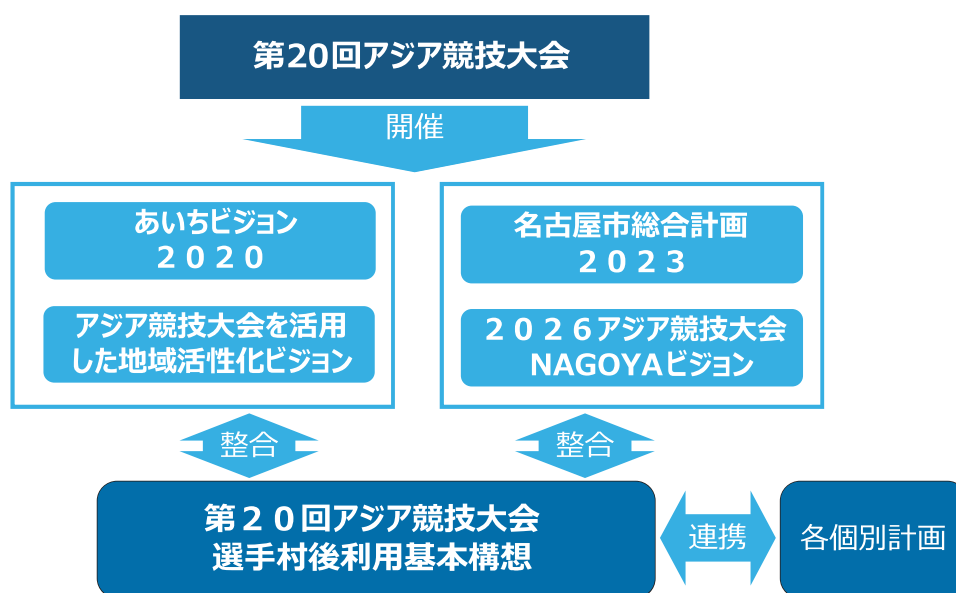


図1：本構想の位置づけ

3

持続可能な開発目標（SDGs）との関係

平成27（2015）年9月の国連サミットにおいて、持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）を含む、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択されました。

SDGsでは、世界共通の目標として、健康や教育、経済成長、気候変動に関するものなど、多岐に渡る17の持続可能な開発目標と、169のターゲットが設定されており、いずれも令和12（2030）年までの達成を目指すものです。SDGsは国際社会全体の普遍的な目標であり、地域の持続的な発展にとっても大変重要な目標です。

愛知県及び名古屋市は、国に対しSDGsの達成に向けた取組を提案し、令和元（2019）年7月にSDGs未来都市として選定されていることから、本事業を進める上でも、その理念を念頭に置いた国際的な潮流を踏まえた構想とします。



図2：「持続可能な開発のための2030アジェンダ」で記載された国際目標